

<番外編> エピソード of テ・アナウ No.1



私がニュージーランドのテ・アナウでコロミコ・トレックの会社を設立、事務所を構えたのは1984年のこと。以来2005年に事務所を撤収するまでの約20年間、そして現在に至るニュージーランド大自然ウォークの物語はあまりに長すぎて、完成するのは何時になることやら。今は他にやるが多すぎて集中して物書きに専念する心境ではないのです。そこで10年ほど前に手がけた「ニュージーランド大自然ウォーク30年の情熱」という未完のドキュメンタリー？の中から、アトランダムに記事をピックアップして、「山旅便り番外編」として皆さんにお届けしようと思います。ニュージーランドに行ったことのある人もない人も平野ガイドの山歩き人生エピソードあれこれお楽しみください。

■ 史上最大の神体験・Uパス大滝の奇跡

私はテ・アナウで仕事生活していた20年間、フィヨルドランドやニュージーランド各地の大自然を歩きまわり、様々な困難危険に遭遇してきましたが、いかなる時も最終的には必ず神の助け、導きによりすべて無事に切り抜けてきました。まずはその中でも、思い出す度に背筋がゾクゾクする神体験のお話から。

それはミルフォード・ロードの途中から始まる Mistake Creek と Hut Creek という2つの沢を U Pass という険しい峠越えで繋ぐ難ルートを一歩で歩いた時のことだった。これは日帰りでは不可能なロングコースであったので、大きなフレームザックに、テント寝袋、食料、それに重たい一眼レフカメラとレンズを入れたカメラバッグを上部に括りつけての重装備で出かけた。このコースは一般コースよりも遥かにグレードの高い経験者向けのルートで、Moirs Guide というフィヨルドランドの難コース、ルートを紹介したガイドブックが唯一の頼りだった。

私は「上部のフラットに出るには、滝のすぐ右を登る。」という記述をしっかりと頭にたたき込んで、沢を詰めその大滝にさしかかった。沢沿いのルートは意外に歩き易く、良い足場を探しながら、滝の上部に近付いた時、大きな岩壁に行く手を遮られた。右にトラバースするか、それとも左の滝沿いに登るか。私はその時、「滝のすぐ右を登る」ということが頭にあったので、迷いなく滝に近い直登ルートに手をかけた。足場を確保しながら、次の手がかりに手を伸ばした瞬間、身動きが取れなくなってしまった。「これ以上動いたら、間違いなくザックごと落ちる」私は身に迫る危険を察知して、そのままゆっくりと右肩のザックベルトをはずしてから、ためらいなく一気にザックを体から離れた。その瞬間、ザックは崖を落下して落

ち、2度ほど下の岸壁にぶつかった大きな音と共に、一番下の滝壺に落ちていったのだ。この時私が判断に迷い、あと数秒遅れたら、間違いなく自分もザックと共にあの滝壺へと落ちてしまったことだろう。

ザックの重さから解放された私は、ようやくバランスが保てた。いったん少し下に戻り、小広いテラスから下をのぞくと、自分のザックがはるか下の滝壺でぐるぐると渦を巻いて回っていた。空荷で滝壺まで下ると、ザックは片側のフレームが折れ、上部に付けていたカメラバッグの中の一瞬レフカメラも変形していたが、主な荷物は無事のようだった。それまで一番大切にしていたカメラは使い物にならなくなってしまったが、何としても命が助かったのだ。本当に間一発のところで命拾いをしたものだ。私はただただ神に感謝した。

私のその後の行動は、今なお自分でも信じられないほどの神がかり的なものだった。あれだけの恐怖体験をした後、普通ならどう考えても無難な方へ戻るとするのが当たり前のことだ。ザックを回収した私は、水に濡れて一層重くなったザックを背負い直し、再び上部目指して登って行った。その地点に出た時、初めに目を付けていた右側の崖をトラバースしてみると、そこにはもっと安定した手がかりのあるルートが見えた。今度は安全に最後の崖をよじ登り、滝上のフラットに登りついたのである。そこには荒々しい岸壁に囲まれた神々しいまでに美しい緑の草原大地があった。その日私はフラットの一角でテントを張り、翌日 U パスを越えて反対側の沢を下り、当初の目的を達成したのである。

それにしても、あの時なぜあれほどまでの気力が湧いてきたのだろうか。登るのを諦めて元来た道に戻り、途中の森で空しいキャンプをすることが情けなかったのか。それともそれまで夢に描いていた山上の別天地でのキャンプを何としても実現したいという思いが勝ったのか。今の私にはその時の心境は全く思い出せない。今なお強烈に覚えていることといえば、あの時ザックを体から離れた瞬間の、神様から支えられたような感触だ。

.....

私はこの U パスでの悪夢以来、滝に対して特別な注意を払うようになったのは当然のことだ。あのような場面は絶対に繰り返してはならない。いかなる難コースも決して無理をせず、安全確実なルートを冷静に判断する。あの時の体験が、その後の私のブッシュ・ウォークにどれほど役に立ったことか。

■ ケブラーの森・フィヨルドランド大自然ウォークの原点

今ではミルフォード・トラックやルートバーン・トラックについて、フィヨルドランドの3大トレッキング・コースとして有名になったケブラー・トラック。テ・アナウ湖のサウス・フィヨルドの南側、ケブラー山脈のど真ん中を周遊する全長65キロのトレッキング・コースが開通したのは、1988年のこと。それまでこのケブラー・トラックの一角には、東側のラクスマア山の手前までと、反対側のアイリス・バーンまでは既成の登山道があったが、それ以外のほとんどの部分は、全くの未開地またはかすかなフミアト程度の困難なルートであったところだ。それを膨大な費用と人力、機械力を使って、およそ3年という歳月を費やしてようやく完成されたものだった。



かつて、ラクスマア山への山道は、ほんの踏み分け程度の細道で、険しい部分もあったが、山道はブナの落葉が長年に渡り積もって腐葉土となった自然の柔らかい道であった。森を抜けると、ふかふかとした快適なタソックの草原帯となり、南峰の頂上までは自分でルートを見つけて岩の斜面を登り、そこから本峰までは見晴らしのよ

い尾根歩きといった、実にワイルドで自然そのものの山歩きを楽しめたものだ。そして帰りには中腹の草原帯をポールの目印を頼りに縦断、森の入口から険しい旧道を急降下してドック・ベイ辺りの登山道と合流する、変化に富んで野性味溢れる周遊コースがあった。

しかし、小型のブルドーザーを駆使して作られた新道は、従来の小道が全て幅広く固い登山道と化し、急な山道も殆ど傾斜のないジグザグ道が増え、3倍以上も長く単調な山道となってしまった。また、山小屋から先はすべて尾根を回りこむ長い薪道となり、従来あった展望の良い尾根ルートは無くなってしまった。いったい何故、従来からあった尾根ルートで道を造らなかつたのか。これは機械で作ったゆえの当然の結果といえるだろう。機械で作業のしやすい緩い斜面を選んで道を切り開く。コースの良さはこの次で、作業優先の登山道造りの結果といえるだろう。これはこのケプラー・トラックが長く単調になってしまったことの大きな理由でもある。

ともかくこれで最も見晴らしのよかつたラクスマア山南峰へのルートはなくなり、本峰へは山腹に作られた巻き道縦走路をたどって、反対側から往復するという、遠く、長く、単調なコースでしか行けなくなってしまったのだ。この新道の開通と同時に、かつての旧道は廃道となり、これであの周遊コースは消滅、ツアーとして公に歩く事はできなくなってしまったのである。私は大いに落胆したが、こうなってしまったからには、割り切って考えるほかは無い。確かにケプラー・トラックは、これまで我々が楽しんできた野生的な山歩きを楽しめるエリアではなくなってしまったが、一般人にとってはより安全で歩きやすい新しい登山道として生まれ変わったのだ。それに、かつてミルフォード・トラックやルートバーン・トラックが同様の方法で機械で作られた後、やがて自然に溶け込む山道となったことを考えれば、いずれこのケプラー・トラックの山道も、自然が回復してそれなりの自然歩道となっていくことだろう。私はそのことを期待して、また自ら言い聞かせて、以後静かにケプラー・トラックを見守る事にした。

テ・アナウから一番近いこのケプラー・トラックというフィールドを、ツアーに活用するにはどうすればよいものか、私は新たな可能性を模索した。すでに従来の周遊コースは使えなくなった以上、新道を利用して、ラクスマア山を往復する他はない。しかし、以前よりも遥かに道のりが長くなり、しかも単調なコースは、あまりに面白味が欠けるし、日帰りとしては長すぎる。そこで考えたのが、ヘリ・ハイクであった。テ・アナウからヘリコプターで一気に森林限界上の山小屋にランディング、そこからラクスマア山頂上を往復して、帰りに新道を下ってテ・アナウへというプランである。そしてさらに湖畔に出たからの単調な歩きをカットするために、プロッド・ベイまたはドック・ベイの湖畔からヨットでテ・アナウへ戻るというオリジナルの日帰りツアーを考えたのだ。当時、テ・アナウではまるで海賊船のような大型帆船ヨットがあり、これを所有しているマリーという男は息子峻一が通っていた幼稚園の園長先生の旦那で、気が向いたときに湖で渡し舟のような仕事を殆ど道楽のような形でやっていた。彼は赤ら顔の大男で、まさに海賊船の船長といったいかつい風貌に似合わぬ優しい笑顔は皆に大人気、以後ツアーの名物男となる。

こうして、このケプラー・トラック・ヘリハイクは、コロミコの一般向けコースとして、現地での個人客、日本からのツアーとして人気商品となっていった。しかしながら、この新コースは、私が目指す大自然ウォークとは程遠い、あくまでもコロミコ・トレックの営業を向上させるためのものであった。もちろん、さほど山歩きの経験がない人々にとっては、フィヨルドランドの素晴らしさを最も楽に味わえ、充分感動も得られたほかにはない素晴らしいツアーであった事だろう。しかしケプラーの本来の素晴らしさを知りすぎている私にとっては、決して納得のいく仕事としてガイドをするには耐え切れず、誰でもガイドのできるこのコースは、やがてスタッ

フに全て任せるようになっていった。

その後の私にとってケプラーの山と森は、あくまでも自分の野生本能を満たす癒しの場所として、またいうなれば一種の修験の場考え、かつて愛したケプラーの旧道を中心にさらなる原始の世界を歩き回ようになっていった。もちろん、規制の厳しいニュージーランドの国立公園内では、道なき原生林を許可なしに営業として人を案内する事は厳しく禁じられている。しかし、鹿やポッサム狩のハンターや山歩きのエキスパートがそうであるように、自分の責任において困難なルートを求めて自然の中を歩く事は自由であるのだ。私は毎朝の散歩に、また暇を見つけてはケプラーの森の中へと入っていった。

●旧道に残された唯一の大自然、さらなる原始の世界へ

ケプラー旧道は、もともとフミアト程度の道で、時折見られる赤い小さなプリキ板のみが目印の難コースであった。それが廃道となって以来、一切の仮払いや整備がされず、そのルートは年々困難なものとなっていった。しかしそのお陰で原始の森はますます深くなり、人の多い一般道とは全くかけ離れた静寂の世界に包まれていた。このケプラー旧道は、上部の森の入口まで続く一本道であったが、私はこのコースを基点としてさらに奥深く原始の森へと分け入っていった。ある時は、北へと続く尾根の東側を流れる深い沢に注目した。この沢を詰めて行けば、ラクスマア山から続く草原の末端部に出て、上の森を横切れれば旧道の森の入口と繋がれるかも知れない。私は地図上で最も近いと思われる地点から尾根を離れて、沢を目指した。レインフォレストと呼ばれるフィヨルドランドの森は、大きなシダや灌木が密生して、一歩間違えば猛烈なヤブに行く手を阻まれる。どこのヤブを掻き分ければ歩きやすいか、すべて経験と野生の勘を頼るしかない。そして時に頼りになるのが鹿の作ったケモノ道だ。これを見つけると、以下に猛烈なブッシュといえども、比較的楽に突破する事が出来る。時には鹿になったつもりで四つん這いになって歩かねばならないこともあるが、それが最良の抜け道となるのだ。

しかし鹿が自分の目的で作った（何度も同じところを歩いて自然に出来たものだが）この道は、もちろん人間にとって都合の良い方向を目指しているわけではない。その場の状況に応じて役に立つものであるか、瞬時に判断してたどっていかねばならない事はいうまでもない。私は旧道の急な細尾根から一本の鹿道をたどり、ヤブを書き分け、目指す沢に降り立った。地図にも名前のないこの未知の沢は、殆ど両側を急な森の斜面で塞がれていたが、川底は意外と歩きやすく、右に左へと渡りながら、どんどん上流へと詰めていった。川を塞ぐ滝に出くわすと、片側のヤブを漕いで高巻き、また時には水に浸かりながら、ようやく源流にたどり着くと、そこには思っていた通りのラクスマアの草原があった。奥には見覚えのある赤茶けたラクスマアの南峰がそびえていた。私は左手の森に頭を突っ込み、再び鹿道を見つけて森を横切り、旧道上部の森の入口を目指した。後日私はあの沢をケプラー・クリークと勝手に命名し、新たな周遊ルートを完成させた。その後このルートは、スタッフや居候の絶好の修行とトレーニングの場の一つとなった。

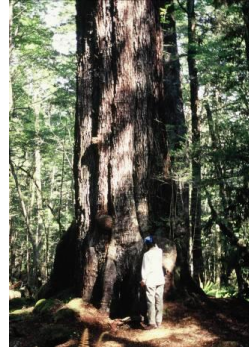
私はこのケプラー旧道を基点に、その他あらゆる森と沢に分け入り、その都度必ずといってよいほど迷い、ひたすら森をさまよったものだ。しかしいかに迷っても、この旧道のお陰で、最終的には戻ってくる事が出来たのだ。ケプラー旧道は、私にとって正に大自然の古楽であり、観音菩薩の手の平のような有難い救いの場であった。

●ケプラーの森最大の巨木・赤ブナ大王物語

そんなある日、私は旧道からそれて、反対側のフォレスト・バーンの沢を目指していた。そこにはおそらくハンターが付けたであろう赤いテープのマーカ―が時折あった。私はこの目印を頼りに森の奥深くへ分け入っていったが、何度歩いても同じところへ戻ってしまう。これ以上迷ったら帰れなくなってしまうと、旧道とぶつかる

であろうコール・クリークに沿って戻る事にした。殆ど平地を流れるその小沢の蛇行は凄まじく、深いシダのジャングルに覆われた川岸沿いのブッシュは、いつまでたっても旧道にたどり着かない。やがてやっとの事で見つけた赤いマーカーにホッとひとと息ついて腰を下ろすと、目の前にこれまで見たこともないほどでかい赤ブナの巨木が立っていた。周囲 10メートル以上はあろうかと思われるその巨木は、まるでケプラーの森の神といった威厳のある姿で私を見下ろしていた。これがその後長年に渡り、私に森のパワーを与え続けてくれた「赤ブナ大王」との初めての出会いであった。

ところで、赤ブナというのは、日本にあるブナとは全く異なるニュージーランド独特のブナの種類の事。ブナは英語名で Beech Tree といい、ニュージーランドには赤ブナ Red Beech、銀ブナ Silver Beech、山ブナ Mountain Beech の 3 種類のブナがあり、いずれも常緑で日本のブナのように全部が落葉する事はない。夏の間に葉が生え変わるので、ニュージーランドのブナの原生林は 1 年中緑の世界だ。また、葉も日本のそれよりも遙かに小さく、山ブナはまるでツゲの葉のよう



△赤ブナ大王から気をもらう

に細かい。銀ブナはギザギザのある 1 センチ程度の小さな葉で、一番葉の大きい赤ブナでも、せいぜい 2 から 3 センチというもの。だから日本のブナを知る人も、言われてみなければ絶対に分らないほど、ニュージーランドのブナは独特の雰囲気を持っている。特に赤ブナは赤黒いガサガサの木肌で、根元は分厚いコケで覆われ、いかつい瘤を持つ巨木は、その威厳に満ちた姿で原始の森の主として、ひときわ強い気のパワーを周辺に放っている。

この「赤ブナ大王」は、ケプラー旧道から意外に近い場所にあった。それまで 10 年以上に渡り数え切れぬほど歩いた旧道から、ほんの 15 分ブッシュをかき分けた場所にあるとは。私はケプラーの森の奥深さを思い知らされたものだった。私はそれ以来、一人で、またスタッフを連れ、旧道周辺を歩く度にこの大王を訪れたものだ。巨木の前で食事をしたり、昼寝をしたり、そこは我々のみ知る秘密の森の聖地であった。

この赤ブナ大王の南側には、さらに深いブナ原生林に覆われた大きな山の塊が続いていた。テ・アナウからケプラー方面を眺めると、ラクスモア山などのケプラー主稜線の遙か手前に、全山濃い緑に覆われたブナ原生林の大きな山並みが見える。赤ブナ大王は、この長大な尾根の北のはずれに立っている。私は地図上に道もないこのブナ山がいつも気になっていた。この山を縦走して、赤ブナ大王に繋げるルートはないだろうか。そこにはおそらく人知れぬ赤ブナの巨木もあるかもしれない。ある時私は、ケプラー・トラックの入口の水門から一般道を南下して、2 本目の沢から西に向かってブナ山を目指した。沢沿いのルートはすぐにヤブに阻まれたので、シダの急斜面を這い上がり森のルートを行くことにした。背丈以上のシダをかき分け、密生した灌木の壁に頭を突っ込み、大きな倒木をまたいで、ひたすら西へと進んでいった。やがてブナ山へと続く急な斜面を登りきると、ようやくヤブの薄くなった尾根に出た。これはブナ山から東に伸びている支尾根の一つに違いない。そこからは何と歩きやすい鹿道がついているではないか。どんな森の山でも、尾根には必ず鹿道が付いている。鹿も一番歩きやすいところに道を作るからだ。私はこの鹿道と尾根に立つ赤ブナの巨木を頼りに、急な尾根道をたどり、最上部の主稜線に飛び出した。そこから尾根を北に辿り、最高地点と思われるピークからケプラー旧道を目指して尾根を下っていった。下からは単純と思えたこの尾根も、実際に歩いてみると実に複雑で、一歩尾根を間違うと東のテ・アナウ湖方面への尾根道となり、逆に間違うと西のフォレスト・バーンへと落ち込む急

な尾根道へと迷い込む。二つの大きな山のコブを乗り越え、高度が下がるとようやくシダのジャングルとなり、コール・クリークの沢にぶつかった。それまでさんざん迷いまくったこの魔の沢であったが、この沢にぶつかれば何とかなる。沢沿いのブッシュをかき分け、ようやく見覚えのある森の風景となり、ついに赤ブナ大王にたどり着いた。

私はそれ以来、機会を見つけてはスタッフを連れて何度も歩き、ようやく一つのメインルートを完成させた。その後、いろいろなサブ・ルートを作り、時間と体力に応じて、スタッフのトレーニングの場として、また自分自身の修行の場として、赤ブナ大王を巡るルートを歩きまくったのである。とにかくこの赤ブナ大王は、私のテ・アナウでの仕事人生において、一番大きな心のよりどころであった。重大な考え事があったとき、仕事上の悩みや迷いがあったときには、大王の懐で 1 人瞑想に耽ったものだ。

私がこの赤ブナ大王と最後に会ったのは、コロミコ・トレックの事務所を閉鎖して、テ・アナウを去る 2005 年の 3 月の事であった。赤ブナ大王の太い幹に抱きつき、最後のパワーをもらい、そして将来必ずの再開を約束して別れを告げた。私はそのとき、ふと大王の幹から育っていた一つの若い小枝が枯れている事が妙に気にかかっていた。その後日本に戻ってから間もなく、テ・アナウに残っていたスタッフから突然の知らせを受けた。

「大王が倒れました。」それまで私同様に大王を敬愛していた亀山にとって、突然現場で目にした大王の死は、さぞや強烈な衝撃であったことだろう。しかしその時の私は、何故か冷静で、「やっぱりそうか。あのときの不安は的中したのだな。」と、まるで大王からすでにその死を告知されていたかの様な心構えが出来ていたのかもしれない。

考えてみれば、以前からほんの少し斜めに立っていた大王は、そろそろその長い寿命を全うする時期が近かったに違いない。これがもし私がテ・アナウにいたとき倒れていたとしたら、事務所の閉鎖問題その他で落ち込んでいた私は、もはや立ち直る事が出来ぬほどの衝撃を受けたことだろう。今思うと、赤ブナ大王はその最後の力を振り絞り、私が去るまで頑張り続けてくれたのだとつくづく思う。

その 2 年後、ようやく再びテ・アナウを訪れる機会があり、私は大王の元へとケプラーの森を走っていった。大王はその巨大な体を森の大地に横たえてもなお、偉大であった。他の木を殆ど巻き添えにすることなく、そして寄りかかる事もなく、理想的な場所で大往生していた。倒れた大王の幹に登ると、私は改めてその巨大さを実感した。地上から 2 ㍎以上もあろうかという横たわった幹の上は、森の中に突然浮かび上がった台地のような広大なスペースが広がっていた。かつて大王を見上げていた森の広場を、今は幹の上から見下ろすという実に不思議な感覚にとらわれる。私は大王の幹の上にしばし横たわり、心の中で大王に語りかけた。「長い間本当にありがとう。あの頃はこの俺に元気を送り続けてさぞや疲れた事だろう。俺があまりに多くの気をもらいすぎたので大王の死期を早めてしまったのだろうか。」すると心の奥底で大王は答えた。「そんな事はない。ワシはいつも元気なパワーを持ってここにやってくるお前が好きだったよ。逆にワシがお前からいい気をもらえたから、あのときまで頑張れたのさ。」私はその心の声を聞いたとき、やっと心の迷いが晴れた思いがした。

その瞬間、再び私と会った大王の魂が、安らかな思いで昇天していく光景を見たような気がした。



△赤ブナ大王の堂々たる大往生

…TO BE CONONTINUED…乞うご期待…

日本の山旅4月のお便り・予告版

5月6月の山旅日程・詳細はもう少々お待ちください!

4月の山旅予定は以下の1本のみとなりました。日帰りコースですので、今からの申し込みも可能、残席4あり、1名での申し込みも可能ですので、大至急ご検討ください。5月以降の山旅は<4月のお便りその2>でご案内します

■焼山峠から小樽山、乙女高原 日帰りコース

①4月22日(木) ②〇 発 ★健脚度:2+~3
●現地参加料金:¥10,000(塩山駅集合解散) 🚗:¥4,000

奥秩父連山のはぐれ山、金峰山の南方に位置する小樽山は、訪れる人も少なく、自然林、自然道が残り、本来の自然をのんびりと楽しめる山です。誰もが有名人気の金峰山に集中する中自分たちだけの静かな山旅を楽しめる貴重な山です。最悪の林道歩き・父恋し路コースは立ち入り無用、小樽山のベスト&最短コースの焼山峠から往復後、乙女高原の森と草原をそぞろ歩くゆったり歩き、日帰り。現地集合、自宅送迎いずれも可。

■塩山駅(9:00集合)=クリスタルライン=琴川湖=焼山峠 1527m...新道コース...展望岩...一杯水...△小樽山 1713m...小樽峠...旧道コース...焼山峠(周遊約3時間20分)=乙女高原 1670m...森のコース...富士見台...△ヨモギ頭 1725m...ブナ爺さん...富士見峠...草原のコース(周遊約1時間30分)=塩山駅(17:00頃着)

①現在2名で実施決定、残席4あり。自宅送迎、現地集合いずれも可能

■筑波山・人の少ない裏登山道コースで

筑波山の新しい歩き方・残された自然林・自然道を歩く

●5月22日(土) 発 ★健脚度:2+~3
●現地参加料金:¥10,000(つくば駅山駅集合解散)

<Aコース>:一般向け(健脚度2+~3)
<Bコース>:やや健脚向け(健脚度3~3+)

◆伊豆の山旅・日帰りコース◆ 🚗自宅送迎あり

●出発日:以下の3コースはいずれかを2名から実施。先行予約優先。

①4月24日(土) ②5月14日(金) ③5月21日(金)

●現地参加料金:¥10,000(三島駅集合・解散) ★健脚度:2~3
▼猿山よりも楽にブナ森歩きを楽しめるゆったり周遊コース▼

①伊豆山稜線歩道・三蓋山~ブナ森周遊

▼天城最奥の秘峰への最短ルート、天城古道からブナ尾根を辿る▼

②二本杉峠(旧天城峠)から天城古峰

▼伊豆の山旅で一番楽にブナ森歩きを楽しめるゆったりコース▼

③天城峠からブナ森尾根ゆったり逍遥

*以下の2コースは歩行時間が長いので、登山口に近い湯ヶ島温泉に1泊するのが一般的ですが、やや健脚、元気組のための日帰りコースを設定しました。いずれも2名から実施、定員6名。1泊コースも可能です。

▼水生地から本谷川を遡行、水源上部の淵れ沢を詰め八丁池へ▼

■狩野川源流を辿り八丁池へ、日帰りコース

①4月23日(金) ②5月14日(金) ★健脚度:3+
●現地参加料金:¥10,000(三島駅集合・解散) 🚗:¥4,000

■伊豆猿山~小僧山・滑沢峠から往復

天城随一のブナ原生林、小僧山から猿山・シャクナゲの季節に

●5月15日(土) 発 ★健脚度:3~3+
●現地参加料金:¥10,000(三島駅集合・解散) 🚗:¥4,000

*猿山から小僧山にかけての尾根周辺は天城シャクナゲの群生地です。5月中旬にはミツバツツジと合わせて花の山旅を楽しめます。

■大マテイ山と雁ヶ腹摺山・シオジの森

●5月28日(金) 発 2日間 ★健脚度:2~3
●現地参加料金:¥27,000(大月駅集合・解散) 🚗:¥4,000

▼アカヤシオとシロモジ、ブナ森の新緑の季節に▼

■御在所岳・武平峠コースと三人山

●5月7日(金) 発 2日間 ★健脚度:3
●現地参加料金:¥35,000(桑名駅集合・解散)

■玉原高原ブナ林・鹿又山とニガ秀山、玉原湿原

関東で一番近いブナ林、新緑の山旅2日間

●6月4日(金) 発 2日間 ★健脚度:3
●現地参加料金:¥39,000(上越新幹線上毛高原駅集合・解散) 🚗

▼裏磐梯で一番ブナ森がしい2か所のブナ森をゆったりプランで歩く▼

■新緑の裏磐梯・雄国山と雄子沢&デコ平ブナ原生林

裏磐梯五色沼周辺の原生林と溪谷・新緑の山旅 ★健脚度:2-3

●6月11日(金) 発 2日間
●現地参加料金:¥42,000(会津若松駅集合・解散)

▼ブナの名山を平野流コース巡りでベストスポットをゆったりと周遊▼

■鍋倉山・巨木の森と天水山ブナの森 2日間コース

●6月18日(金) 発 2日間 ★健脚度:2-3
●現地参加料金:¥42,000(新幹線飯山駅集合・解散) 🚗

▼志賀高原の新しい歩き方、自然道の残る穴場スポットを巡ります▼

■奥志賀大自然遊歩とカヤノ平ブナ原生林 2日間

志賀高原で自然林が残る2つのコースとブナ原生林逍遥

●6月20日(日) 発 2日間 ★健脚度:2-3 🚗

■奥只見・沼の平ブナ原生林周遊、恵みの森2日間

日本一のブナ密度を誇るブナ王国・只見随一のブナ原生林新緑の季節

●6月25日(金) 発 2日間 ★健脚度:2-3 🚗
●現地参加料金:¥43,000(飯山駅集合・解散)

■コロミコ・トレック連絡先: ☎/ FAX: 045-481-0571

■平野携帯: 080-5665-9186

✉ koromiko2@pop07.odn.ne